

複合辞であることを支える共時的条件 —動詞句由来の複合辞を中心に—

Japanese Compound Particles and their Synchronic Conditions

藤 田 保 幸
FUJITA Yasuyuki

キーワード

〔複合辞〕 Compound Particle ・ 〔共時的条件〕 Synchronic Conditions

〔動詞用法の衰退〕 Decategorization from Verbal Usage

〔意味分化〕 Semantic Differentiation

〔メタ言語的自己言及〕 Meta-linguistic Act to One's Own Utterance

一、はじめに

1 複合辞とは、周知のように、いくつかの語がひとまとまりになって、固有の「付属語」(辞)的な意味を担うものとして用いられる形式である。複合辞には、「複合助詞」と「複合助動詞」とがあるが、この稿では以下、「複合助詞」のうち動詞句由来のものにもっぱら限定して考察する。

複合辞となっている形式については、「ひとまとまり性」「具体的意味の希薄化」(それが、文法形式化につながる)といった特徴が指摘されてきた。

例えば、複合辞「～に限って」を例にすると、(1) — a のような例で「～に限って」は“(うちの子)だけは”に近い、他は問題にせず「うちの子」のみを以下のように「ない」とするような関係の意味を表すものになっている。そして、(1) — b のように、「～に」と「限って」の間に語句の挿入は許されず、これがひとまとまりの形式になっていることがわかるし、(1) — c のように、「限って」の部分に連用修飾をかけようとしても不自然になるが、これは動詞としての具体的な意味が希薄化している故と考えられる。

(1) — a うちの子に限って、嘘なんかつくはずがない。

(1) — b *うちの子にだけ限って、嘘なんかつくはずがない。

(1) — c *もっぱらうちの子に限って、嘘なんかつくはずがない。

確かに、こうした形式は、動詞としての具体的な意味(つまりは、動作・行為としての意味)が希薄になり、ひとまとまりになって、辞的形式として働くものとなっているといえる。

さて、従来の複合辞の研究では、こうした複合辞が複合辞となっていることを、もっぱら、動詞の意味の希薄化にともなってひとまとまりの辞的形式になるという通時的な変化(文法化)が起こったといった解釈を与えることで根拠づけようとしてきた。

しかし、現代日本語を共時的に研究する立場に立つなら、共時論としての、複合辞が複合辞であることの論（根拠づけ）があるべきではないかと、筆者は考えている。この稿は、そのような考え方に拠る一つの試論である。

複合辞が複合辞であることの共時的条件として、筆者は、まず次の二つを区別しておくべきだと考える。

- ┌ A. 複合辞であることを支える条件
- └ B. 複合辞であることの契機となる条件

言語は共時的に見れば一つの体系であり、個々の形式（語・語句）の価値も他との関係の中で決まる。このことは複合辞においても同じであるはずで、複合辞が複合辞であることは他の語・語句との関係に支えられていると考えられる。Aとして問題にしたいのは、このような意味での「条件」である。特に注目されるのは、動詞句由来の複合辞の場合にはもとの動詞との関係であろう。当該複合辞が、もとの動詞を核とする単なる動詞句ではなく一つの複合辞と解されて働くにあたっては、もとの動詞との関係が支えになるということがあるはずである。この稿では、そうした見方に立って、特に複合辞ともとの動詞との関係について、次の第二節で考えることにしたい。

一方、ある形式が複合辞として働くものであることには、そうであることの契機となっている要件が考えられるだろう。Bとして問題にしたいのは、そのような意味での「条件」であり、例えば後で述べる「メタ言語的自己言及」になることなどは、そうした「条件」の一つである。ただ、「メタ言語的自己言及」については既にいくらか述べてきたことであり、また、Bの「条件」については、それを十分に尽くせるまでには考えも進んでいないことであるので、第三節として簡単にふれるにとどめたい。

二、複合辞であることを支える条件

2—1 この節では、複合辞が複合辞であることを支える条件として、動詞由来の複合辞について、もとの動詞との関係を考えることにする。なお、ここで言う「もとの動詞」とは、複合辞を形成する核となっていると見てとれる動詞で、複合辞の意味とある程度連続性の感じられる意味のものとしておく。また、「もとの動詞との関係」とは、あくまで共時的な意識にもとづいて、どのような動詞・どのような意味・用法のものと結びつけられるかを考えるものである。

まず、考察の対象として、国研〔山崎・藤田〕（2001）でとり上げた「助詞的複合辞」のうちから、動詞句由来のものを抜き出す。具体的には、「連用辞類1」とした格助詞「に」を含む動詞句由来のものと、「連用辞類3」とした格助詞「を」を含むもののうち動詞句由来のものをとり上げる。なお、「と」を含む引用形式（及び、「～とする」などそれに類する形式）由来の複合辞（「接続辞類1」及び「連用辞類2」）については、第一節で述べたBの条件がもっぱら効いているものと考えられるので、ここではとり上げない。

次に、とり上げる複合辞を一覧しておく。

～にあたって ～にあつて
 ～において
 ～に応じて
 ～に限って・～に限り ～に限らず
 ～にかけて [「名誉にかけて」ナド (譲れない抛り所)]
 ～にかけては ～に比べて
 ～に関して ～に先立って
 ～に際して・～に際し
 ～に至っては ～に至るまで
 ～に従って ～に対して
 ～について ～につけて・～につけ
 ～につれて・～につれ
 ～にとって・～にとり
 ～によって・～により
 ～によっては・～によらず
 ～によれば・～によると

 ～を問わず
 ～を通じて ～をとおして
 ～をめぐって ～をもって
 ～を介して ～を駆って

以下、これらの複合辞について、もとの動詞との関係が共時的にどうなっているのか、整理しながら見ていくことにしたい。

2—2 こうした動詞由来の複合辞ともとの動詞との関係は、先回りして言えば、二つ乃至三つのあり方に大別できようと思われる。

まず第一に、「動詞用法の衰退」という場合が考えられる。

例えば、次の(2)の「～に際して」の場合、複合辞「に際して」は「に」+「際する」+「て」から成るものと考えられるが、動詞「際する」は、もはや「際した」のような述語用法では使えない。(3)の「～に対して」についても同様である。

- (2) — a 有里子との別れに際して、秀樹は記念の品を送った。
- (2) — b *秀樹は、有里子との別れに際した。(そして、記念の品を送った。)
- (2) — c *秀樹は、有里子との別れに際した時、記念の品を送った。
- (3) — a 対立陣営からの批判に対して、青木氏は反論した。
- (3) — b *青木氏は、対立陣営からの批判に対した。(そして、反論した。)
- (3) — c *青木氏は、対立陣営からの批判に対したので、反論した。

動詞の本来的な働きは、述語(殊に、言い切り述語)になることである。それが、もとの動詞でできなくなっているということは、もとの動詞が主語(主体)の動き・あり様を表す表現

性（意味）を乏しくし、もはや動詞として働くものでなくなっているということである。となると、そうした“動詞”を含む複合辞も、当該部分をもはや動詞とは見ることができないので、動詞句とは解されず、動詞句として分析できぬ以上、ひとまとまりの何らかの関係づけを表す形式として働くものでしかなくなる。言い方を変えれば、動詞用法が衰えてしまっているということが、こうした複合辞が複合辞である（でしかない）ということを支えているといえる。注意したいのは、動詞句由来の複合辞においては、当該の動詞の意味が希薄化するなどといわれるが、こうした例では、希薄化が起こっているのは、複合辞におけることにとどまらないという点である。

この第一の関係——もとの動詞が動詞としての用法を衰退させている事例にあたるものとしては、先に掲出したものの中では、次のようなものがそれにあたると考えられる。

～に限って ～にかけて
 ～に関して ～に際して
 ～に先立って ～に対して
 ～について ～につけて
 ～につれて ～にとって
 ～を通じて ～をめぐって

2—3 上に挙げた複合辞について、若干補足しておきたい。

「～に限って」は、もとの動詞「限る」が一見述語用法で使えそうに思えるが、実際は、今日ではそれがかなり難しくなっていると思われる。

(4) — a [?]主催者は、入場者を先着五十名に限った（／限りました）。

(4) — b 主催者は、入場者を先着五十名に限定した（／限定しました）。

(4) — c 入場者は、先着五十名に限ります（≒ダケデス）。

(5) — a 冬は鍋に限る。

(5) — b *冬は鍋に限り、夏は素麺に限る。

(4) — a のように、動作主の行為を表す述語として「限る」を用いた場合は、かなりすわりが悪い印象があり、現代語としては、むしろ(4) — b のように「限定する」を使うのが自然なように思える。また、一見言い切り述語のように見える(4) — c の「(に) 限ります」は、いわば一種のコピュラの形式となっているようで、動作主は主語として立たない⁽¹⁾。(5) — a のような言い方もよく目にするが、これもいわば「冬は鍋だ」のようなウナギ文的表現に近いものと見れば、こうした「～に限る」も一種のコピュラの形式ととり得るだろう。そして、こうした用法では、(5) — b のような「～に限り」や「～に限った」の形はとれない。してみると、こうした「～に限る」もひとまとまりの辞的形式として固定化してきているようである。以上の観察をふまえると、動詞「限る」の本動詞用法は衰退してきており、それが複合辞「～に限って」や文末の辞的形式「～に限る」の存立を支えることになっていると見てよいだろう。すなわち、「～に限って」も、第一の場合の一事例なのである。

また、複合辞「～について」は、この第一の場合の、やや極端な一事例と考えられる。

(6) 日本語の文法について研究する

この「～について」に関しては、藤田(2016a)で既に論じたが、これが「に」+「つく」+「て」から成ることは容易に見てとれる。しかし、これがどういう意味の「つく」とつなが

るのか、もとの動詞との関係がたどりにくい。「つく」は多義語だが、二格をとる「つく」でも、aの“付着”やbの“到着”と関係づけるのは、あまりにかけ離れていて、おかしいことは直観される。

(7) —a ペンキが手につく。

(7) —b 中畠氏は、やっと松山についた。

藤田(2016a)でも論じたとおり、複合辞「～について」は、次のような“実際にあるものにあたる・あるものを見してみる”といった意味の「つく」の用法とつながるものと見られる。

(8) —a 是非現物について、ご検討下さい。

(9) —a この点の詳細は、小田勝氏の『実例詳解古典文法総覧』につかれない。

こうした(8)(9) —aのような用法の「つく」では、もはや述語用法は——(9) —aのような固定化した言い方を除いて——用いられない。

(8) —b *検討のため、現物についた。

(9) —b *この点の詳細を知るべく、小田勝氏の『実例詳解古典文法総覧』についた。

もとの動詞と見なされる使われ方の「つく」の場合、特定の形を除いては述語用法で使えなくなっており、そもそもそのような使われ方がされること自体がめったになくなっていくのであるから、これも第一の場合の一事例——もとの動詞の動詞用法が衰退した極端な事例といえるだろう。そして、もとの動詞が動詞として衰退したことに支えられて、「～について」は具体的な動作性を乏しくして、“対象”を示すというような抽象的な関係の意味を担うと解されるものになっているともいえる。

2—4 次に、第二の関係のあり方として、「動詞用法との意味・用法の分化」というべき場合がある。これは、第一の場合とは違い、意味がつながるものと解せられるようなもとの動詞の用法はちゃんとあるが、複合辞ともとの動詞とで、意味・用法上分化が生じているものであり、複合辞の表しているような意味では動詞は動詞として働かない(言い切り用法が明らかに不可)。分化は、二格・ヲ格の部分⁽²⁾にとる名詞(もしくは節)の意味内容に違いの生じる点に端的に見てとれる。

(10) —a その点、江口氏はプロだから、状況に応じて臨機応変に処理した。

(10) —b *その点、江口氏はプロだから、状況に応じた。(そして、臨機応変に処理した。)

(10) —c 警察は、犯人の要求に応じた。

(11) —a 開会にあたって、誠は挨拶した。

(11) —b *誠は、開会にあたった。(そして、挨拶した。)

(11) —c 誠は、要人の警護にあたった。

(11) —d 誠は、要人の警護にあたって、拳銃を携行した。

(12) —a 時間がたつ(／時間の経過)に従って、友子はだんだん不安になって行った。

(12) —b *友子は、時間がたつ(／時間の経過)に従った。(そして、不安になった。)

(12) —c 友子は、上司の指示に従った。

(13) —a カーテンを通して、人影が見えた。

(13) —b *人影がカーテンを通した。

(13) —c この壁は、厚さ3cmだが、X線を通す。

(14) —a みんな呑気なもので、未奈に至ってはまだ寝ている。

(14) —b *みんな呑気なもので、未奈に至った。(すると、) 彼女はまだ寝ている。

(14) —c 年度末に至って、急に皆慌てだした。

(14) —d *皆、年度末に至った。(そして、急に慌てだした。)

(14) —e ご老公一行は、笠間を経てようやく小山に至った。

いくつか例を挙げてみたが、上の例に見るとおり、複合辞ともとの動詞とでは、意味・用法が違ってきているので、二格・ヲ格の部分にとれる名詞句の意味内容も違っていている。

(10) の「～に応じて」の場合、もとの動詞「応じる」では二格に“要求”“依頼”のような意味の名詞句しかとれないのに対して、複合辞はそうではない。右の(10) —a の例など「状況の如何に応じて」と言い換えてもほぼ同義であることからわかるように、複合辞「～に応じて」の二格の部分には“いろいろなあり様があり得るもの・こと”を示すと解せられる名詞句であれば、さまざまなものがくることができる。広くは“対応”といった意味合いである点では共通するものの、複合辞ともとの動詞とでは意味の分化が見られ、それが二格の部分にとられる名詞句の違いにも反映している。逆に言えば、二格の部分にとる名詞句の違いという意味・用法の分化に支えられて、複合辞「～に応じて」は、動詞句ならざる辞的形式と解されることになる。

(11) の「～にあたって」の場合も同様で、aのように複合辞「～にあたって」の二格の部分には、概して言えば“人為的な出来事”といった意味の名詞句がくるが、こうした意味が明確な名詞句が二格の部分にきた形では、bのように言い切りには使えず、動詞用法にはならない。もとの動詞「あたる」が動詞用法で用いられる場合は、二格には“用務・仕事”のような意味の名詞句がとられる。このように、複合辞ともとの動詞とでは“あることを行う”といった広い意味での共通性は感じられるが、二格の部分にとられる名詞句の違いが、複合辞ともとの動詞の意味の分化を反映している。逆に言えば、もとの動詞の二格とは違う意味内容の名詞句をとることが、「～にあたって」が(動詞句でなく)複合辞であると解されることを支えているともいえよう。もっとも、“仕事”は人によって行われる“出来事”ともとれるから、複合辞「～にあたって」が、“用務・仕事”の意味の名詞句を二格の部分にとることもできる。しかし、そのような名詞句をとったdのような例では、「～にあたって」が複合辞かどうか曖昧になってくるといえる。

(12) の「～に従って」では、“対応”とでもいうような広い意味のつながりは認められようが、もとの動詞との意味分化は更に著しく、それが、二格の部分にとられるものの違いにはっきり反映する。複合辞「～に従って」の場合には、二格の部分にくるのはもっぱら節であり、それも“時間の経過・推移”が読みとれるものでなければならない。一応名詞句もとれなくはないが、aの「時間の経過」のようにまさしく上記のような意味を直接表すものに限られそうである。こうした名詞句や節を二格の部分にとる場合は、bのように言い切りは不可で、動詞としては使えない。もとの動詞が動詞として使われる場合は、二格にとられるのは、典型的には「指示・命令・要求・規則」などといった、「従う」主体に何らかの行為・行動を求めるような意味の名詞である⁽³⁾。このように、複合辞「～に従って」ともとの動詞とでは、二格の部分にとられる名詞・節の内容がはっきり違う。逆に言えば、もとの動詞が二格にとるのとは違う名詞句・節を二格の部分にとることが、複合辞「～に従って」が(動詞句ならざる)複合辞であることを保証するものとなっているわけである。

また、(13) の「～を通して」の場合、“透過”の意味の複合辞に対して、同様の意味で一見

「～を通す」のような言い切りの動詞用法も考えられそうだが、複合辞の場合、ヲ格の部分にとられる名詞句はaのように、“透過する対象”を表すものであり、このような意味のヲ格をとっては、bのように言い切り述語としては使えない。つまり、動詞用法はない。一方、cのように動詞として言い切り用法で使える場合は、ヲ格に“透過する主体”を表す名詞句がくることになる。このように、複合辞「～を通して」ともとの動詞「通す」は、意味としては同じ“透過”のように感じられるが、実は用法に違いがあり、分化が生じている。そして、複合辞「～を通して」は、そこから更に「教務委員を通して、提案する」のような“仲介者”を示すような使い方^{おおもと}にまで用法を拡げているが、（動詞句ならざる）複合辞として働くことの大本には、もとの動詞との用法分化があるといえる。

更に、(14)の「～に至っては」、(そして、先に掲出したものではないが)「～に至って」でも、それぞれの複合辞ともとの動詞「至る」の間で、二格の部分の名詞句のとり方に著しい違いが認められる。もとの動詞「至る」は、言い切りの述語用法はやや使いにくくなってきている印象があるが、一応書き言葉としてeのように言い切り述語として使える。つまり、一応動詞としてもまだ使えるが、こうした動詞用法では、二格にとられるのは、まず“到着場所”を表す名詞句である。そこから、更に「私は、……という結論に至った」のような、二格に“到達した認識・判断”の意の名詞句がくる用法も出てくる。一方、複合辞「～に至って」の場合、二格の部分には“時期”を表す名詞句、複合辞「～に至っては」の場合は、“対比的に考えられる事物”を表す名詞句がくる⁽⁴⁾。こうした名詞句をとった場合、b dのように、言い切り述語の用法はない。複合辞「～に至っては」「～に至って」は、もとの動詞とはっきり違うものに用法分化しており、そのように用法分化していることが、複合辞を（動詞句ならざる）複合辞として存立させているともいえる。

以上のように、考えてみれば当たり前のことだが、複合辞が複合辞であることを支える二つ目の要件は、もとの動詞との意味・用法の分化である。そして、そうした分化は二格・ヲ格の部分にとる名詞句の意味内容の違いというような形に反映される。そのことが、当該の形式が動詞句ではなく複合辞であると把握されることの支えになる。

なお、先に掲出した複合辞のうち、もとの動詞との関係がこの二つ目の場合にあたるものとしては、以上にとり上げたものの他、「～にあって⁽⁵⁾」「(……から)～に至るまで」「～を駆って⁽⁶⁾」「～をもって」もこの例と考えておいてよいだろう。

2—5 さて、複合辞ともとの動詞と見なされ得るものとの関係として、今一つ、「動詞用法との断絶」というような場合が考えられる。これは、第二の場合の一つとして一括しておいてよいのかもしれないが、意味の面での分化という以上に、主として格成分をとるとらないという文法的な問題といえそうなので、いったん別に考えておきたい。この例として挙げられるのは、複合辞「～において」の場合である。

「～において」は、「に」＋「おく」＋「て」から成るものと考えられるが、もっぱら“場所・領域”を示す「～において」と、動詞「おく」とのつながりは、今一つ明確に見てとれない。通時的な事実はいったん措いて、共時的に「～において」と関連づけられそうな動詞「おく」の用法を考えるとすれば、次のような用法に注目することができるかもしれない。

(15) — a 支店を福岡において、営業している。

(16) — a 首都を東京において、全国を統治した。

これらのヲ格が消えたのが、複合辞「～において」だと見えなくはない。

(15) —b 福岡において、営業している。

(16) —b 東京において、全国を統治した。

少なくとも、(15) (16) —a の文の意味するところと、(15) (16) —b の文の意味するところは、矛盾せず重なるものといえる。例えば、「支店を福岡において、営業している」ことは、「福岡において、営業している」ことでもある。このように考えると、共時的には、複合辞「～において」は、こうした、何かをどこかに“設営”する用法の「おく」とつながるところのあるものと理解される可能性がある⁽⁷⁾。

しかし、逆に複合辞「～において」にヲ格を付加して、右のような「～を…において」パターンに書き直そうとしても、できないことがふつうである。

(17) —a 烏賊川市郊外において、殺人事件が発生した。

(17) —b *××(?)を烏賊川市郊外において、殺人事件が発生した。

(18) —a 龍谷大学において、日本語学を講じている。

(18) —b *××(?)を龍谷大学において、日本語学を講じている。

(19) —a メインホールにおいて、レセプションを行った。

(19) —b ?会場をメインホールにおいて、レセプションを行った。

そもそも「～を…において」のような表現では「おく」に“設営”というような動作的な意味があり、必ずしも“場所”をもっぱら問題にする言い方ではない。これに対し、複合辞「～において」は、もっぱら“場所”を表示するものである（更には、具体的な“場所”のみならず、抽象的な“領域”のようなものまで表す意味の広がりを持つことにもなっている）が、ヲ格をとらないものであることが、上記のような用法の動詞「おく」とはっきり断絶した形式と理解されることの一助となっているといえよう。

以上要するに、共時的に考えてみて、もとの動詞と見なされ得る“設営”の用法の「おく」のとりヲ格をとらない（とれない）ことによって、複合辞「～において」は、そうした関連づけられそうな「動詞用法」と断絶し、動詞句ならざる辞的形式と解されるものになっているわけである。つまり、関連づけられそうな「動詞用法」と断絶を作っていることが、複合辞であることの支えになっているということである⁽⁸⁾。

2—6 複合辞ともとの動詞との関係について以上で見てきたこと——特に、一つ目と二つ目の場合——をふまえて、ここで次のような「複合辞」類について考えてみたい。

○～によって・～により：①行為者、②基準・尺度

○～によって（は）・～によらず：影響を与える条件、及びそれが影響しないこと

○～によれば・～によると：情報の拠り所

これらは、先に掲出したとおり、国研〔山崎・藤田〕(2001)で「複合辞」とされたもので、動詞「よる」を核としてさまざまな「複合辞」が生まれているように見える。しかし、これらを「複合辞」として見てよいかは、いささか問題のようである。以下に、それぞれの用例を挙げ、もとの動詞の言い切り用法が可能かどうか併せて見てみる。

(20) —a 「羅生門」は、芥川龍之介によって書かれた。

(20) —b *「羅生門」(の執筆)は、芥川龍之介によった。

(21) —a この事例を砂川説によって検証した。

- (21) —b この事例の検証は、砂川説によった。
- (22) —a 天候によって、出発を見合わせる場合がある。
- (22) —b 出発するかどうかは、天候による。
- (23) —a ニュースの速報によれば、T氏が次期大統領に決まったらしい。
- (23) —b T氏が次期大統領に決まったというのは、ニュースの速報による（／よっている）。

それぞれの「複合辞」ともとの動詞「よる」の関係を考えてみると、上の例に見るとおり、「～によって」の“行為者”用法以外は、いずれも、同様の意味・用法の言い切り述語の文を考えることができる。ということは、こうした「複合辞」は、まだ動詞との意味・用法の分化が進んでおらず、複合辞として十分確立されていないと考えられる⁽⁹⁾。この稿で述べてきたことは、複合辞の認定といった問題に関しても、参照すべき考え方である。

また、この稿で動詞句由来の複合辞について見てきたが、名詞句由来の複合辞についても、同様の見方が可能である。一、二例を挙げてみると、

- (24) —a 何も知らないくせに、偉そうなことを言うな。
- (24) —b 頭に手をやるくせがある。
- (25) さんざん迷ったあげくに、断念した。

(24) —aの複合辞「くせに」は、通常の名詞の用法の場合の「くせ」とははっきり意味が違っている。少なくとも、通常の名詞用法であるbの「くせ」のような、“個人的習慣”といった意味では理解できない。つまり、(もとの)通常の名詞の用法との間に「意味・用法の分化」が生じている。また、(25)の「あげくに」については、「あげく」がもはや通常の名詞用法では使えない。つまり、(もとの)名詞用法が「衰退」しているわけである。なお、「あげくに」は「に」を伴わない「あげく」の形で使えるから、複合辞というより接続助詞的に働く形式名詞と見るべきかもしれない。しかし、いずれにせよ、通常の名詞用法の「衰退」が、辞的形式として働くことの支えになっていると考えることができよう。

以上、複合辞であることを支える条件として、目下考えるところのあらましを述べてみた。

三、複合辞であることの契機となる条件の覚書

3—1 次に、複合辞であることの契機となっている条件について述べるが、今のところ、それをすべて尽くせるまでに至っていないので、ここでは現段階で考えていることを覚書的に記す。

ある動詞句が辞的形式であると解されることになる契機として注目したいのは、当該形式が「メタ言語的自己言及」になることである。「メタ言語的自己言及」とは、話し手が自ら言葉を紡ぎ操りつつ、そのようにしていること・その言葉に同時に言及する言い方ということである。例えば、次の例では、話し手は「いい加減にしろ」という言葉をそこで紡ぎ出しつつ、同時にそのように“いう”ことに「というんだ」で言及している。このような言い方は、「メタ言語的自己言及」の一つといえる。

- (26) おい、いい加減にしろというんだ。

そして、こうした「というんだ」は、話し手が発話しているという事実⁽¹⁰⁾に注意喚起させ、一種の(伝達のムードのような)辞の意味を表すものになっていると見られる。

こうした「メタ言語的自己言及」の言い方は、文末のみならず、文中にも出てくる。その場

合、話し手がある言葉を持ち出すことに自ら光をあて、それと以下との関係を示すことになるが、話し手の紡ぎ出す言葉と言葉の関係づけを示すということは、助詞の担うような辞的な意味を示すものとなるということである。

(27) —a 試験といえば、成績提出が早まりましたよ。

(27) —b 試験は、成績提出が早まりましたよ。

(28) —a 寒いといっても、去年ほどではない。

(28) —b 寒いけれども、去年ほどではない。

(27) —a では、「試験」という言葉を話し手が持ち出し、それに「といえば」で同時に自己言及しつつ、以下にそういう言葉（＝話柄）を持ち出したこととかかわって想起されることを述べる表現を導いている。つまり、「～といえば」が、いわばbのような題述関係に近い関係を作るものとなっている。また、(28) —a では、「寒い」という言葉を話し手が持ち出し、それに「といっても」で同時に言及しつつ、以下にそういう言葉（＝認識）を持ち出したこととは対立する内容の表現を導いている。「～といっても」が、この場合は、bに近い逆接の関係を形成するものとなる。

いずれも、「～といえば」「～といっても」のような形式が、話し手が自分自身の紡ぎ出す言葉に自己言及するものとなることで、話し手の述べる言葉と言葉の関係づけの表現——つまりは、助詞的な複合辞形式となるわけである（また、「～といえば」「～といっても」の「いう」主語は、当然話し手であり自明なので言語化されなくなる。主語が立たなくなることも、複合辞として働くことの契機となっている）⁽¹⁰⁾。

引用形式から複合辞がいろいろ生まれるのも、こうした「メタ言語的自己言及」の言い方に自ずと使われやすい形式だからといえる。

3—2 さて、話し手が言語表現を行うということは、スル表現的に見れば、話し手が言葉を紡ぎ叙述を進めるということだが、ナル表現的に見れば、叙述が進み、話が進んでいくということである。従って、そのような観点で見れば、次のような複合辞「～となると」も、「話・話柄」がそこまで進み、そう「なると」ということであり、そこでなされている話し手の言語表現に話し手自らが同時に言及するものであって、「メタ言語的自己言及」の言い方である。

(29) オとヲの混同は十一世紀以降進み、ついに統合されるが、オヲの混同の古例となると、『地蔵十輪經』元慶七年点のものが知られている。

また、次の複合辞「～に至っては」も同様であり、いわば“話”が「未奈に至っては」と、叙述の進行に話し手が自己言及しているものといえる。

(14) —f みんな呑気なもので、茜はパソコンの待ち受けのハムスターを眺めているし、唯希は歯を磨いている。仁子は遅い昼食をとっているし、未奈に至っては、寝ている。

「～となると」については藤田（2016b）、「～に至っては」については藤田（2017）で、このあたりのことも含めて既に論じた。

ちなみに、「～となると」「～に至っては」の「なる」「至る」の主語を考えるなら、“話ガ”のようなことになろうが、それは自明なので言語化されることはない。ここでも、主語が立たなくなることが、複合辞として働くことの一つの要件となっている。

以上のように、ある動詞句が「メタ言語的自己言及」の言い方になっていることは、その句

が複合辞として働く一つの契機となっていると考えられる。

3—3 もちろん、「メタ言語的自己言及」の言い方になるということだけで、すべての複合辞について、それが複合辞として働く契機・要件を説明することはできない。更に考究すべきところであろうが、今のところ思い及ぶ範囲で、複合辞が複合辞であることの契機となっていると思えることをなお挙げてみるとすれば、「主語が失われる」ということを考えることができよう。

例えば、次の例で「～として」は理由を表す言い方と解することができる。

(30) — a 当局は、フジモト氏が入国管理法に違反したとして、逮捕した。

(30) — b 当局は、フジモト氏が入国管理法に違反したとし、逮捕した。

(30) — c フジモト氏は、入国管理法に違反したとして、逮捕された。

(30) — d *フジモト氏は、入国管理法に違反したとし、逮捕された。

aでは、しかし、まだ「当局」が「として」の主語と解せるので、「として」は動詞句の性格を保っており、bのように連用中止の形も可能だが、cのように「する」主語が消えると動詞句の性格を失い、dのように「とし」の形もとれなくなる。つまり、形が固定化して、はっきり複合辞として働くものになるのである（こうした「～として」については、藤田（2003）参照）。

先の「メタ言語的自己言及」の場合にも、主語が自明であることで立たなくなっており、それが当該形式が複合辞として働くことに関与するものと見られた。「主語が失われる」ことは、ある形式が複合辞として働くことになる一つの契機となっているといえよう。

ただ、上記のとおり、「主語が失われる」ことが、「メタ言語的自己言及」になっている結果として出てくることという関係で考えられる場合があるのであれば、両者は「契機」として同列に並べられるのではなく、次元の違うものと見るべきかもしれない。そのあたりの位置づけについても更に考える必要があるし、こうしたことの他に、複合辞であることの契機となる条件として、なおどのようなことが考えられるのか、考察を進めていかなければならない。

四、結び

4 この稿で述べたかったことの要点をくり返せば、次のようなことである。

言語とは、共時的に見れば一つの体系であるから、現代語において複合辞のような形式が成立していることの所以も、共時的な体系の中に——具体的には、動詞句由来の複合辞なら、その動詞との体系の中での関係に求められなければならない。動詞句由来の複合辞に対してもとの動詞の動詞としての用法が衰退していることや、複合辞ともとの動詞との間に意味・用法の分化が生じていることなどは、複合辞が複合辞である（でしかない）ことを支える条件といえる。

また、ある形式が複合辞として働くことの契機になっていると見られる条件も確かにあるが、これについては、なお考察を深める必要がある。

以上、複合辞研究においては、もちろん各論的記述がまだまだ深められる必要もあるが、それとともに、こうした全体にかかわる筆者なりの見方を示すことも意義はあると考え、考えるところを試論的に述べてみたものである。

（2017、1、26 稿）

〔注〕

- (1) こうした文は、話し手がこのような処置をすることを告知する言い方で使われ、「限」る主語は話し手（もしくは、話し手が代表・代弁するもの）であって自明であるから、言語化されない。
- (2) 複合辞が格成分をとるといのもおかしいので、以下では形としての「～に」「～を」の部分という意味で「ニ格の部分」「ヲ格の部分」という言い方をする。
- (3) 更に、「友子は、田舎暮らしの時は、その土地の習慣に従った」のような名詞句もとれる。なお、辞書を見ると「時代の流れに従う」のような用法を掲げるものもあるが、「友子は時代の流れに従った（／従っている）」のような言い切りの文では使いにくいように思える。
- (4) 確かに、「中京圏にはしょっちゅう行っている。刈谷に至っては庭のようなものだ」のように、ニ格の部分に場所を表す名詞がくることもあるが、そうした場合も、名詞句は決して“到着場所”のような意味合いではない。
- (5) 複合辞「～にあって」は、例えば「酷寒の斗南にあって、彼はなお希望を捨てなかった」のように用い、ニ格の部分には“場所”や“地名”を表す名詞句がくる。そうした名詞をニ格の部分にとった場合「*彼は酷寒の斗南にあった」のような言い切り述語の文にはできない。人を主語として言い切り述語で「～にある。」のように使う場合は、ニ格には「～の地位・職」のような名詞句をとるのがふつうである。つまり、複合辞ともとの動詞とで意味・用法が分化しており、それがニ格の部分にとる名詞句の内容の違いに見てとれる。なお、複合辞「～にあって」のニ格の部分に、「～の状況」のような“状況”を表す名詞句がくると考えられることがあるが、この場合は「彼は、なお困難な状況にあった。」のような用法が可能であり、複合辞が「～の状況」といった名詞句をとるとは見ない方がよからう。
- (6) 動詞「駆る」が「黒頭巾は纈纈城までまっしぐらに馬を駆った。」のようにヲ格の部分にもっぱら「馬」（もしくは「馬車」ぐらい）がくるのに対し、複合辞「～を駆って」は「勢いを駆って」のようにヲ格の部分に「勢い」「余勢」という名詞がくる。「*勢いを駆った。」と言い切り用法では使えないから、一応もとの動詞と複合辞で用法が分化していると見ることもできる。しかし、動詞の言い切り用法自体がかなり難しくなっており、また、もとの動詞も複合辞もヲ格の部分にとれる名詞が限定されているので、むしろ、「馬を駆って」や「勢いを駆って」をひとまとまりの慣用表現と見ておいた方がよいかもしれない。
- (7) これは、もちろん複合辞「～において」が歴史的に動詞「おく」の設営用法に由来するなどということをいっているわけではない。複合辞「～において」が現代語において共時的に動詞「おく」のどのような用法と関連づけて意識され得るかということを考えているのである。
- (8) 「～に（／と）比べて」も、ヲ格をとらないことで複合辞として働いているといえるかもしれない。「～に（／と）比べて」の場合、もとの動詞とのつながりははっきりしていて、ヲ格をとらないことで「動詞用法との断絶」が「～において」ほど明確になっているともいえない。しかし、ヲ格があればはっきり動詞句になってしまうのだから、ヲ格をと

らないことで、動詞用法と断って複合辞形式であろうとする方向をとっているというべきである。

なお、「比べる」は動詞として述語言い切りの用法が思いの外衰えてきているようで、「比べる。」「比べた。」「比べている。」「比べていた。」の例を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で検索すると、それぞれ24例・8例・2例・2例（計36例）であった（しかも、「～の数を比べた」のようにヲ格のみをとる例がかなりある）。特に条件を付けない「比べる」は、13420例であったので、言い切りの用例はほとんどないといってよい程度である。こうした動詞用法の衰えも、「～に（／と）比べて」が複合辞として働く支えになっていると思われる。

- (9) 「～を介して」も複合辞とされ、「丹羽氏を介して出講を依頼した」のように使われるが、「このたびの出講の依頼にあたっては、丹羽氏を介した」というような言い方ができそうであるので、同様にまだ複合辞として十分に確立していないということになるだろう。
- (10) こうした経緯については、既に藤田（2000）400頁以下にふれている（ただし、そこでは、「引用表現」からそうでないものへの転成という点に力点を置いた書き方になっている）。また、藤田（2016c）でも再論した。

〔参考文献〕

- 国立国語研究所〔山崎誠・藤田保幸〕（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所刊
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- （2003）「接続助詞の用法の『～トシテ』について」（『滋賀大国文』41）
- （2016a）「複合辞『～について』『～につき』をめぐって」（『日本言語文化研究』20）
- （2016b）「複合辞『～となると』について」（『表現研究』103）
- （2016c）「引用形式の複合辞への転成について」（『国文学論叢』61）
- （2017）「複合辞『～に至っては』について」（『国文学論叢』62）

〈付記〉この稿の内容のもとになったのは、2014年度・龍谷大学国文学会研究発表会（同年6月28日）において「複合辞の存立を支える共時的条件」と題して発表したものであるが、今回大幅に再考してまとめ直している。また、この稿の執筆に先立って、その内容を第13回・形式語研究会（2017年1月21日・於愛媛大学）において発表した。その際にいただいたいくつかのご意見によって内容を改めたところがある。ご意見をいただいた各位に感謝申し上げます。また、「比べる」の用例の検索・確認については、山崎誠氏にご助力いただいた。御礼申し上げます。本研究は、JSP科研費（基盤研究（B）「日本語の多様な表現性を支える複合辞などの『形式語』に関する総合研究」・課題番号26284044）の助成を受けたものである。